

明治期以前の利根川・荒川の治水

1. 中条堤 (利根川)

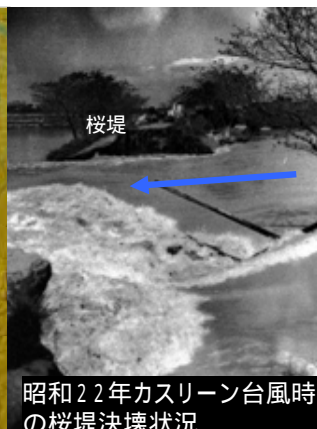
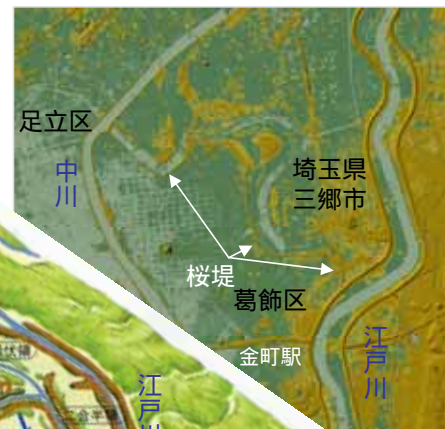
中条堤の下流部が狭窄部になっているため、洪水時には右岸側に溢れ始め、大遊水地になり下流への洪水量を減じた。

- 中条堤によって守られる下郷が中条堤を防御し、被害を受ける上郷が撤去しようとするため、論争・紛争がおり別名「論所堤」と呼ばれた。
- 上下流の対立が激しくなったため、幕府の強権を背景に、詳細かつ厳重な取りきめのもとに堤防の管理・運営が行われた。
- 明治43年洪水による中条堤決壊の復旧方針の対立により、県会の権限外の知事不信任が決議されるなど埼玉県政は大混乱に陥った。
- 県が利根川堤防の早期築造を要請することを条件に、中条堤の修復、補強が実施された。宮村忠, 1981, 利根川治水の成立過程とその特徴, アーバンクボタNo.19



3. 桜堤 (江戸川)

- 水元桜堤は、江戸幕府8代将軍吉宗の時代に、江戸川の外堤防(二次堤防)として整備された。
- 明治43年洪水時には、利根川のはん濫水は、桜堤で食い止められ、江東地域一帯は浸水を免れることができた。
- 昭和22年カスリーン台風洪水時には、懸命な水防活動にもかかわらず、桜堤は決壊し葛飾区、江戸川区などに甚大な被害が生じた。



現在も桜堤は残っている



2. 日本堤・隅田堤 (荒川)

- 荒川の洪水が江戸市街地に流入するのを防ぐため、日本堤、隅田堤を漏斗状に築き、上流に広がる水田地帯を遊水地として利用した。
- 関東大震災の震災復興や東京オリンピック時期の再開発により、日本堤は撤去された。



4. 難航した江戸川開削(カスリーン台風時の排水活動)

- 桜堤によって堰き止められたはん濫水は、刻々と水位を増し決壊は必至との見解から、地元の官民は江戸川の堤防開削を都知事に進言¹⁾。
- 都知事は内務省と協議の上、江戸川の開削を決定¹⁾。
- 開削作業は、作業隊、指揮者、器材等の行き違いもあって時間を要し、終に、桜堤は決壊¹⁾。
- その後、GHQにより江戸川堤防の爆破作業が実施されたが、(上手いかず)最終的には、手作業で実施された²⁾。

1) 東京消防庁, 昭和22年9月, 東京大水災と消防の活動
2) カスリーン台風写真集刊行委員会, 1997, 報道写真集 カスリーン台風

